

エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



「AG 5 補習授業校情報交換会」その後

AG 5 運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談員 佐々信行

7月号の本誌でご報告したように、新型コロナウイルス感染予防対策をきっかけに「AG 5 補習授業校情報交換会」が始まりました。参加した方からのリクエストで回を重ね、今も続いています。集まって話すといろいろなことが見えてきます。すべての補習授業校の教室に子どもたちが戻れる日を待ち望みながら、学び合いが続いています。

今月号では、前回ご紹介した後の様子についてお伝えします。

これまでの情報交換会のテーマ

4月にスタートさせてから、9月末日の時点で十五回もの「AG 5 補習授業校情報交換会」を行ってきました。各テーマは次の通りです(日は日本時間)。

- ・ 第一回 補習授業校のウイルス対応策(四月五日)
- ・ 第二回 ヨーロッパ地区の情報交換(四月十三日)
- ・ 第三回 オンライン授業以外の選択肢(四月二十二日)
- ・ 第四回 今伝えたいこと、聞きたいこと(五月五日)
- ・ 第五回 遠隔授業と「評価」(五月十三日)
- ・ 第六回 元気の出る話(五月二十四日)
- ・ 第七回 やっぱ大変、一年生と幼稚園(六月十日)
- ・ 第八回 補習授業校の複式授業(六月二十一日)
- ・ 第九回 日本語で本を読ませる(七月五日)
- ・ 第十回 低学年の算数(七月二十日)
- ・ 第十一回 もっと聞きたい。幼稚園、どうしてますか(八月三日)
- ・ 第十二回 中学生の日本語/国語指導(八月十三日)

- ・ 第十三回 コロナ対策の今(八月二十六日)
- ・ 第十四回 オンライン授業下の学校行事(九月六日)
- ・ 第十五回 ここが楽しい、中学生の指導(九月二十二日)

仲間がいると

新型コロナウイルスの問題が出てくる前から、多くの補習授業校の先生方から、「同じ立場の先生たちと話したい」という希望をうかがっていました。図らずも、この危機がたくさんの先生たちが集まるきっかけになりました。同じ願いをもって働く仲間なので、お互いの気持ちがよく分かり、真剣な中にも楽しい時間を過ごせる場になっています。

テーマによりませんが、今では毎回五、六十人から百人ぐらいの方に参加していただけるようになりました。一時間の間に発言できる人数は限られるので、「聞くだけ参加」になってしまう方も少なくないのですが、それでも「同じように苦労しながらがんばっている人たちの話を聞いて元気が出た」という声をたくさんいただいています。

テーマによっては、参加者を少数のグループに分けて少しでも発言をしていただけるように工夫してい

ます。ときには、情報交換会の後に「雑談タイム」を設けて自由な交流をすることもあります。

ここでのつながりを機に連絡を取り合い、教材やアイデアを交換し合うようになった先生たちもいます。

複数の補習授業校に加え、日本国内の学校も巻き込んでSDGs(*)の学習に取り組み、その成果をオンラインで発表するという元気なプロジェクトも立ち上がりました。

ウイルス感染が広まって登校ができなくなった初めのころは、「当面休校するしかない」と考える補習授業校も少なくありませんでした。しかし、情報交換をしてみると、登校できなくても子どもたちの学習の場を作る手段がいろいろあることが分かりました。

先に取り組んだ補習授業校の試行錯誤の結果から、後発の学校はいろいろな手掛かりを得ることができました。「コンピューターは苦手」という先生たちも、子どもたちのためにやってみようと考えようになりました。夏ごろには、情報交換会に参加する先生たちが所属するほとんどの補習授業校で、何らかの形で登校できない子どもたちに学習させる環境を提供するようになりました。この面では、日本国内の学校より補習

授業校の方が先を行っていると言え
るかもしれません。

探す人は多いほどよい

インターネットの世界には無限と
言ってもいいほどの情報があふれてい
ます。あまりにも量が多いので、そ
の中からほんとうに役に立つ情報を
探し出すことは容易ではありません。
・海外に住んでいても日本の本を子
どもたちに読ませる方法は？
・日本式の筆算を分かりやすく見え
てくれる教材は？

・小さい子が楽しく日本語に触れる
チャンスは？
・中学生を日本の古典に親しませる
には？

親や先生は、必要に迫られて子ど
ものためにいろいろなものを探しま
す。いいものに行き当たるにはそれ
なりの時間と運が必要ですが。情報
交換会では、先生や親が見つけた効
果的なウェブサイトを紹介されてい
ます。直接子どもに見せるものだけ
でなく、先生たちが授業の準備に役
立てたり、IT技術を学んだりでき
るサイトもあります。同じ立場の人
が見つめてくれたものはやはり分か
りやすく便利です。

私自身も情報交換会で教わったサ
イトのお世話になることが少なくあ

りません。過去の情報交換会資料(*
2)を見ていただくと、そのような
サイトがたくさん載っています。

先生の仕事とは

遠隔授業の方法として、テレビ会
議システムを使ったライブの授業に
次いで採用されているのは、授業を
録画して視聴させる方法です。これ
にはいくつかのメリットがあります。

第一のメリットは兄弟姉妹がいて
も時間の重なりを気にすることなく
困らないことです。同時にオンライ
ン授業に参加するには子ども数だ
けコンピューターなどのデバイスが
必要になりますが、録画なら家庭で
時間を調整して見せることができま
す。日本に一時帰国している生徒が
授業を受けたという場合にも録画
なら時差の心配をしなくてすみます。
テレビ会議に慣れていない先生は、
ライブの授業には、やはり緊張しま
す。「話すことが分からなくなっ
てしどろもどろになったらどうしよ
う」「オンラインなので保護者も一
緒に見ることができ、毎時間授業参
観のプレッシャーを感じてしまっ
う」と心配になるのは無理もありま
せん。録画の授業だと、生徒に見せ
るものをあらかじめ自分もチェック
できるし、失敗したらやり直しもで

きるので少しは安心感があります。
また、ネットの接続が途切れてしま
うようなことがあっても困りません。

授業を録画するときは、先生はカ
メラの前で、目の前に子どもたちが
いることを想像しながら授業を進め
ます。子どもたちに向かって「ここ
を声に出して読んでみましょう」、
「先生と一緒に歌いましょう」など
と行動を呼びかけることもあります。

視聴する子どもを見ていた保護者に
よると、小さい子どもたちは結構指
示に従って声を出したり、動いたり
しているようです。先生が話すとき
と子どもたちが聞くとときには時間の
ずれがありますが、ある程度のコミ
ュニケーションは成り立つようです。

さて、先生たちの実感では、授業
の録画を製作するのは、実際に教室
で授業するより何倍も大変です。「や
り直しができる」という利点も、別
の角度から見ればそれだけ負担を強
いられることとなります。それだけ
苦勞して録画した授業を一度で使い
捨てにするのはもったいない話です。
A組の先生が作ったものをB組でも
利用するというのは賢い方法でしょ
う。二人の先生が交代で録画をすれ
ば、授業の準備は半分で済みます。

同じ学年で学ぶ内容は毎年ほぼ同
じです。とすれば、今年録画した授

業を来年も利用することはできない
でしょうか。同じ先生が同学年を担
当すれば子どもたちは昨年録画した
授業とは気づかないかもしれません。
とても分かりやすい授業の録画がで
きたら、子どもたちが登校するよう
になっても使えるかもしれません。

録画で十分伝えられるものもある
し、ライブのコミュニケーションが
効果を発揮する場面もあります。実
際、録画とライブを組み合わせた授
業を行っている補習授業校もありま
す。このように考えてみると、「授業
とは何か」「先生は何のためにいる
のか」という疑問に突き当たります。
登校できない中での授業の形を考
えていくうちに、教室でなくてもで
きることに、生徒と先生が直接触れ合
わなければできないことが見えてき
ました。先生でなくてもできること
はITなどに任せて、先生は先生で
なければできないことにエネルギー
を注げばもつとよい教育環境ができ
るのではないのでしょうか。

今の状況は望んだものではありませんが、図らずも先生たちの仕事を
見直すチャンスになっているのです。

「評価」と「成績」

遠隔授業の「評価」「成績」をどう
考えるかということは、情報交換会

で何度も話題になりました。各補習授業校ではそれぞれに悩んだ末、それぞれの対応をとっています。

八月末のアンケートでは、「登校して行った授業と合わせて評価に加味する」が約二〇%、「遠隔授業の部分は評価に加味しない」が四〇%、「その他」が一五%、「まだ分からな

い」が二五%でした。(個人の回答)
 遠隔授業でのテストで「カンニング」をどう防ぐかということになる
 と決定打はありません。「生徒と先生の信頼関係で」という先生もいましたが、ある補習授業校からは、「わが校のある国では、カンニングは文化のようなものになっているので、その日本的な感覚は全く現実的でない」という反応がありました。テストが成績の大きな要素になっていて「カンニング」を防がないのであれば「遠隔授業の部分は評価に加味しない」のが最善ということになるかもしれません。ここでも、「テストとは何か、評価、成績とは何か」とい

に立つ資料を用意することも生徒の能力の表れと見ることができま

す。また、成績を学習の成果とみると、テストで測れる部分はどれだけあるかということも考え直す必要があるでしょう。対面で授業を行う場合でもテスト以外の評価の指標はいろいろと存在します。「テストに頼らない評価」を考えれば、遠隔授業でも公平な評価が可能かもしれません。

ある先生は、「評価の目的は生徒のモチベーションを高めること」と考え、自分で自らの学習の成果を評価させる方法をとりました。「この学習をすることによって自分がどれだけ高められたか」ということを目に見える形で自覚させようとしたのです。この考え方には賛同の声が多く上がりました。確かに、他人と比較しない状況で自分の学習を振り返るなら、「カンニング」はまったく意味を持ちません。この補習授業校では他人との比較になるような「通知表」は発行しないことにしたそうです。

「評価」「成績」は、学校の中で重要なことに違いないのですが、ともすれば、「今までのやり方」にあまり疑問を持つことなくやりつづけていたという面があるかもしれません。コロナ禍で、それができなくなって、いろいろな角度からこの問題を考え

させられることになりました。先生たちが本質を考えることは必ず子どもたちの学習環境をよくすることに

子どもが持っていた

授業の中で、グループで話し合わせたい場面があります。教室なら、グループの様子を見ながら机間巡視をして、しっかりと話し合いに取り組みていないグループに注意をしたり、話が行きづまっているところにヒントを与えたりすることが出来ます。あるテレビ会議システムには参加者をグループに分けて話し合わせる機能があるのですが、グループがそれぞれ独立した「部屋」に割り当てられるため、先生はそのうちの一つにしか加わることができません。すると、ほかのグループの様子が全く見えなくなってしまうのです。

ところが、同じシステムを使いながら、グループ活動を積極的に進めている先生がいました。詳しく聞いてみたところ、「オンラインの会議ではすべての生徒をメインルームにおいて、グループの話し合いは「2M」のグループ通話でやらせる」ということでした。オンライン授業が始まる前から、子どもたちはグループ通話で日常的に話し合っていた

のです。

生まれた時からコンピュータやスマートフォンのある社会で生きてきた子どもたちは、先生たちが知らないいろいろな手段を知っています。困ったとき、子どもたちに相談してみると、彼らはすでに解決策を持っているかもしれません。

しかし、「大人が知らないことを当たり前のように知っている」ということは、「大人の世代は教えられなくても自然に身に付けてきた力が、教えられないと身につかない」ということにもなるでしょう。「今の子どもに教えなければいけないものは何か」ということもあらためて考えさせられます。

*1 SDGs(Sustainable Development Goals)：二〇三〇年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。二〇一五年九月の国連サミットで採択された。

*2 情報交換会資料：https://www.ag-5.jp/post/detail/13

※情報交換会のスケジュール等は「補習校教員交流Facebook」で。
<https://www.facebook.com/groups/1664125650300837>

